文庫書下ろし 長編時代小説

赤木駿介

石川五右衛門

(上)

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説
石川五右衛門(上)
著者　赤木駿介

2005年7月20日　初版1刷発行

発行者　篠原睦子
印刷　豊国印刷
製本　関川製本

発行所　株式会社　光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話　(03)5395-8149 編集部
8114 販売部
8125 業務部
振替　00160-3-115347

© Shunsuke Akagi 2005

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN4-334-73917-2　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

石川五右衛門(上)

赤木駿介（あかぎしゅんすけ）

光　文　社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次——〈上〉

第一章　名物（めいぶつ）千鳥（ちどり）ノ香炉（こうろ）……7
第二章　十二歳の一人旅……50
第三章　遊女ちどり……94
第四章　無斎（むさい）と松風の謎……136
第五章　仇討ち原ノ松原……186
第六章　五鬼丸（ごきまる）という女頭目……231
第七章　五右衛門はいずこへ……273

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

石川五右衛門——〈上〉

第一章　名物千鳥ノ香炉

一

「五右衛門っ、逃げやっ！」
妹のめゝを背負い、母の叫び声をうしろに聞く。
駿府の町は、猛火につつまれた。
武田勢が火を付けてまわる。
炎を吹きながら家が崩れる。焼けた木っ端が飛んでくる。火の粉が舞う。
「母上っ、ついてきてくだされっ！」
声をかけるのがせいいっぱいだ。
逃げる人、押し寄せる武田の兵。あいだをかいくぐるが、早くは走れない。妹がこんな

に重いとは思わなかった。
「行けっ、わたしの里じゃっ。め、めゝをたのんだぞっ！」
声は前のときよりも遠くなった。数歩もどった。
よろける母が見えた。起き上がろうとするが、すぐに倒されてしまう。
「は、母上っ！」
なにか叫んでいる声は聞き取れない。倒れたまま、両手を前へ前へと泳がせているだけである。腰や背中を踏まれてもいる。
助けに行こうと立ち止まったとき、
「どけっ、じゃまだ！」
雑兵（ぞうひょう）に突き飛ばされた。
転びそうになったが、踏ん張った。背中で悲鳴があがった。
「ぎゃっ」
めゝが、ずり落ちそうになった。
うしろ手で押しあげた両手に、ぬるりとした生温いものがあった。
抜き身がふれたのか。
「めゝっ、待ってろっ！」

ごったの中では下ろせない。
振り返った。母はついて来てない。後戻りは無理だ。
五右衛門は泣きながら走り出した。
「あにじゃー、痛いようー、痛いようー」
突進してくる敵兵。前と後ろの逃げる人、人、人……。
「がまんせい、泣くなっ！」
「兄者っ！」
「めゃっ！」
「痛いよー」
「なんじゃ、たわけがっ、このっ！」
悪態をついても、怒りも焦りもおさまらない。
敵兵の姿はなくなったが、人の群れはつづいている。縫って進んだ。
「転ぶなよっ」
励ましの声をかけてくれる人もいた。
少しずつ、人波もばらけてきた。
藁科川（わらしながわ）の水面（みなも）も眼に入るようになったが、両手はしびれ、足はずんと重い。妹は、あと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

十数日で四歳だ。ぐったりして、全身の重みが背中にのしかかっている。その子を背負って、駿府から二里（八粁）の道程を走って来た。

へたり込みそうだ。

ここは、どの辺りなのか……。

立ち止まって、逆光の残照に光る山裾の森の形をさぐった。小瀬戸の入口らしい。あの木々がそうなら、母の里、怒田沢は近い。

来た道を見たが、母の姿はどこにもなかった。

駿府は、黒煙と赤い炎におおわれ、夕空は染ってきた。

ぎくっとなった。妹は泣いていない。

あわてて下ろした。身体をさぐるまでもなかった。帷子が大きく裂け、尻には赤黒い血のりが盛り上がっている。

「めゝっ、めゝっ、しっかりせいっ！」

身体をゆするたびに、小さな首が、ぐらんぐらんする。

「死ぬなっ！　死ぬんじゃないぞっー」

叫んでいるのか、泣いているのか、五右衛門自身にもわからなかった。

二

城外からのざわめきに、不安が走った。
御宝物役小頭の石川権大夫は、部屋を飛び出した。
東の方角に、大蛇のごとき砂煙がつづいている。
数呼吸もしなかった。館に、雪崩を打って一団が逃げ込んできた。お屋形さまを取り囲む数人の馬廻衆、近習の面々だった。親しい近習頭の海老原伊三郎の必死の顔も見られた。
聞かねばならぬことがある。全速で走って馬の脇についた。
「海老原さまっ！」
権大夫を認めた伊三郎は、
「掛川だっ、名物をたのむぞっ！」
背中で言い捨てて走り去った。
権大夫はまっしぐらに広場を突っ切った。
「たわけがっ！」

負け戦だったのだ。それにしても早すぎる。
新たな裏切りがでたにちがいない。
館のあちこちに、黒煙があがっている。町は燃え出してきた。
「南無八幡大菩薩っ」
御宝物庫に駆け込むや、はやる心で灯をともした。何十年も見なれている御宝物が、各段に整然とならべられてある。
権大夫は、眼をつむった。
一つ一つに、来し方の想いがこめられている。甲斐のやつらに渡せるものか。焼き尽くされてたまるものか。
眼をひらいた。
来なければいけない上司を待った。遅い。
権大夫は、真っ先に『千鳥ノ香炉』を下ろして二重にくるんだ。ついで『宗祇ノ香炉』と釣花の『百端帆』をしばった。
いずれもお屋形さまが愛でてやまない名物だ。とくに千鳥は、おのれの千鳥でもある。
組頭はまだだ。五人の配下が来た。
「持てる物だけでよい。わしのあとを追え」

口早やに指示してから千鳥は首にくくり、あとの二点を両手に持った。戸口を出ようとしたとき、忘れ物に気づいた。

「不覚っ！」

引き返した。

棚の前で、配下の小六が手をのばそうとしていた。権大夫の遠縁にあたる家の次男で、長屋にも遊びに来て五右衛門の相手をしてくれる。

「小六、それはよい。これを持て」

宗祇と百端帆を手渡した。

賤機山の城をおさえられてしまった今川方は総崩れだ。駿府の館に防衛設備はない。うなりながら飛んでくる無数の矢。合間にまじる鉄砲の音。怒号が飛び交い、雑兵たちがぶつかりあう。

そうしたなかに、華やいだ色合いが乱れ舞っていた。ちぎられた花々が、冬空に散っているかのようである。御女中たちだ。

悲鳴をあげながら、逃げまどう。

「助けてくだされっー」

髪がほどけ、胸前はゆるみ、裾もわれている。素足には血がにじんでいた。

そのなかの一人に、権大夫の眼が止まった。

「あれは……」

お方さまではないか。

付人に抱えられ、よろめきながら歩かれている。

名将北條氏康の娘、駿河の太守今川氏真の正室ともあろうご身分で、輿に乗ることもできずに落ちて行かれるとは……。

近年、武田と徳川からの家中への切り崩しが執拗につづいていた。

八年前に、前の太守義元が織田信長に討たれたあと、今川家は、嫡男上総介氏真がついだ。

氏康、武田信玄にくらべて器量、経験とも不足だが、尼将軍といわれた祖母の補佐をえてお家を守ってきた。その寿桂尼が病没した。

信玄は、この機を待っていた。

かつての同盟、親族の縁など意味ももたない。三河の徳川に呼びかけ、今川を挟み討ちにしようと謀った。追い出したら、駿河は武田が、遠江は徳川が、切り取る。

以後、武田勢は駿河東部に侵攻しだし、きょう、薩埵峠に攻め込んで来た。

今川勢は、ほとんど戦うことなく駿府に敗走した。武田に内通した者たちが、闘いを放棄したためであった。

権大夫は、時の流れを想わないわけにはいかなかった。

今川家は、二百数十年、駿河を中心に遠江・三河の三国を支配してきた……。

お屋形さまの落ちて行く先は、朝比奈泰朝（あさひなやすとも）の掛川城。城主泰朝は、勇猛さと知略の抜きんでた武将である。

武田、徳川からの返（かえ）り忠（ちゅう）（裏切り）の誘いを一蹴し、不動の忠誠心をもって今川家に仕えている。

配下の者たちが裏門で追いついた。

「行くぞっ。離れずについて来いっ」

権大夫は叫びながら、病弱な妻と二人の子供の身を案じた。

男児の五右衛門は心配ない。小柄だが体力はあり、脚力も強く、俊敏で機転もきく。しかしまだ十一歳。三歳の妹と母をどこまで守れるか。

みんな、無事でいてくれ！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor